

書くことと political correctness: Susan Sontag の *The Way We Live Now* における AIDS 表現の場合

藤 森 かよこ

本論の目的は、「政治的正しさ」political correctness（略して PC）を意識しながら作家が書くとすれば、どんな表現が可能で有効かを Susan Sontag のエイズをテーマにした短編小説を例にして考えることにある。この目的の動機はふたつある。まず第一に、PC という差別的表現を変革する言語改良運動とその運動を支える思想、つまり合衆国において60年代に運動化された人権思想と、その派生物である性の解放思想にとって、エイズほど注意深く扱わなければならない対象はないからだ。第二の理由は、Susan Sontag は、一連の評論活動から判断する限り、書くことには政治的責任があると意識している作家だからである。¹ 特に *Illness as Metaphor* (1978) や *AIDS and Its Metaphors* (89) は、エイズを考えるためにある名著ともいうべきもので、いわば *The Way We Live Now* (86) は、彼女の評論の実践版と考えられる。批評能力と創作能力は必ずしも比例しないことはよく見受けられることだが、彼女の場合どうだろうか？ そういった好奇心も本論の動機である。表題の短篇の分析の前に、エイズという題材のPC対象度の高さ、つまりその政治的濃度と、PC にまつわる書くことの問題を確認したい。

(1) エイズの政治的濃度

周知のように、エイズと名指されず奇妙なガンとして症例が多く発見され、認識されはじめた80年代初頭、患者とは、いわゆる 4H (homosexuals, heroin addicts, hemophiliacs, Haitians) に属すると見られていた。輸血や血液製剤によって HIV 感染した血友病患者を除いては、同性愛者やヘロイン中毒で麻薬注射を回しうちするような都市のスラムに住む貧困層や、ハイチ人というアフリカ系の有色人種の移民に患者が多いということから、82年にエイズとして命名されたこの症候群は、性的階層／経済・政治的階層／人種階層の下位に置かれる人間がかかる病気として考えられた。これらの階層に「道徳的階層」を加えてもいい。マジョリティから見れば、結婚制度・家族制度から逸脱した性的放縦を楽しむ習慣を持つような同性愛者や、勤勉な生活から逸脱し麻薬に耽溺するような人間がかかる病気としても考えられた。つまりエイズはエイズという伝染病としてとらえられず、gender と race と class と、さらに moral において烙印を押されている集団特有の病気、大多数の人間にとっては関係のない病気、「他者の病気」として処理された。初期のころのこうしたエイズ観によって、エイズの医学的研究の緊急性・必要性が理解されず、研究資金の投資も遅らされ、いたずらに感染者が増えてしまったという事実については、Randy Shilts (彼もエイズで94年に亡くなった) の渾身のルポルタージュ *And the Band Played On* に詳しく書かれている。²「他者の病気」ではなく伝染病であることが明らかになると、その忌まわしき発生源として、HIV 感染者やエイズ患者は恐れられ避けられ、より苛烈な差別にさらされた。1981年に最初のエイズ相談室 (Gay Men's Health Crisis) をニューヨークの自室に設けた Larry Kramer 作の劇 *The Normal Heart* (85) には、飛行機のなかでは添乗員から嫌悪され、病院では看護婦からも放置され、死後は葬儀屋にも拒否され、死体はゴミ袋で運ばれたエイズ患者の友人について、登場人物が泣きながら語るシーンがある。それらはすべて事実に基づいていた。伝染病のエイズ患者は、単なる

「他者」ではなく「侵略してくる他者」という危険なエイリアンとして排除されねばならなかった。エイズは、差別のなかの差別、何重もの差別が交錯する場である。それに意識的であろうとする人々は、エイズ患者を AIDS Victims とは呼ばずに、People With AIDS (PWA) と呼ぶ。エイズということばは、性的にも階級的にも人種的にも道徳的にもあまりに差別的な負荷をつけられ、単なる病気（正確にはある一群の症状の総称）以上の意味を持たされているので、できるかぎり患者の性的・階級的・人種的・信条的属性と切り離してエイズをとらえるためにPWAということばが作られたのである。³

ところで、エイズを題材にした書き物はフィクションにせよノン・フィクションにせよ随分と生産されてきている。90年代に入って以来、AIDS Writing の批評書もいくつか出版されている。⁴これは、研究書が書かれうるだけのボリュームと質の高さを「エイズ文学」が持っているということを意味する。1997年1月9日から12日まで開催される第15回 Annual Key West Literary Seminar のテーマは、Literature in the Age of AIDS であることをみても、実はエイズと文学表現の検討が本格的になるのはこれからなのだろう。しかし、プロテスト文学としてのエイズ文学の役割は、1996年現在においてはほぼ終わっていると考えてもいい。エイズに付与されたさまざまなスティグマは、医学的情報の徹底と啓蒙とメディアによって、現在かなりの程度解体されている。エイズという病気の社会的・文化的意味づけが、そのイメージが、病気そのものより患者や患者をめぐる人々を苦しめたことは Sander L. Gilman の *Sexuality* (89) や *AIDS and Its Metaphors* でも指摘されている。AIDS Writing にはこのようなエイズの社会学的・文化的分析も少なくなく、それらもエイズ差別解消に貢献してきた。⁵プロテストが目的ならば、その達成は、今では時間の問題であり、表象の問題ではない。

(2) 政治的に正しい表現って？

繰り返すが、本論は、エイズを題材にすることによる PC 時代における「書くこと」の可能性の検討を目的としている。表現者に可能なかぎりの自由を認めるロマン主義的立場もあれば、表現者には社会的責任があるから反社会的な表現は規制するべきだ考える立場もある。本論の論者は逆説的な意味で前の立場をとる。社会的マイノリティに属する人々を表現する際に、表現者が彼女たちや彼らの社会的不利益に無自覚で、結果として彼女たち彼らに暴力として作用する場合に、その表現者を批判するという表現も支持できるからだ。文学研究者が PC を肯定的に受け入れるとすれば、その研究姿勢は当然、政治批評を支持するものになる。文学作品を含むさまざまなメディアが流通させる表現の政治的意識・無意識を分析し評価する作業をすることによって、政治的不正の縮小の一助でありたいと考えるにまで至るのはごく自然である。また批判し分析するだけでなく、より建設的に肯定的評価ができる表現の発見、紹介をしたいと考えるのも自然である。

しかし、ことはそう簡単ではない。表象のもつ力、効果は期待どおりではない。表象を受け入れる側の個々の偏差も考慮に入れれば、ある表現がどんな作用をするかということは厳密に言えば予測不能である。たとえば James Finn Garner が、古典的な童話の現代の文脈からみたとんでもない差別性に注目し、*Politically Correct Bedtime Stories* (94) と、その続編をいくつか書いている。⁶ Garner のねらいどおり、読者は政治的正当性を実践した表現と伝統的な表現（つまり政治的に不正な表現）の乖離に笑った。Garner 版赤頭巾 (Little Red Riding Hood) は、きこりに助けられたときに「この性差別者！種差別者！男の手助けがなければ、女やオオカミは自分たちの問題を解決できないとでも思っているのですか！」(“Sexist! Speciesist! How dare you assume that womyn and wolves can’t solve their own problems without a man’s help!”) と叫ぶ。きこりは、斧で殺されてしまう。念のいったことに、彼女は women は men を基礎にした女性差別語

だからというわけで、womyn という語を使用している。Garner の意図のなかには、明らかに PC へのからかいがあり、彼の PC 童話にフェミニズム的意義があるかどうか疑問に思うフェミニストもいるだろう。Garner のような商業娯楽志向ではない、かなり良心的な教育志向の書き直し・物語のライフサイクルをめざして、性差別的な伝統的童話ではない alternative な童話を制作しようとする努力もされてきている。Jack Zips は、そうした童話のアンソロジーを、*Don't Bet On the Prince* (86) と題して編んでいる。⁷ しかし伝統的童話に登場する性差別的ヒロインたちの姿から、逆説的に「かわいらしくなんてしてると女はろくでもないめにあうから、あほな努力はやめよう」という洞察をもつ少女だっているだろう。

とはいえ、こうした予測不能性を承知しながら、言説の政治性を自覚している表現者の試みを指摘することは必要な作業だと思われる。congressman を congress member と言い換えたり Indian を Native American と言い換えること、つまり非差別言語 (non discriminatory language) や包含的言語 (inclusive language) や non sexist language の使用を勧める言語変革運動 PC について、ことばなど言い換えても実態は変わらないではないか、という批判もある。⁸ しかし、この運動が人々のことばに対する感受性を徐々に変化させつつあることも事実なのだ。では、単語の言いかえでないレベルの PC 表現、non discriminatory writing, inclusive writing があるとすれば、どんなものが考えられるだろうか。本論は、Susan Sontag の *The Way We Live Now* (86) はその例であると提示したい。

(3) 短篇分析

エイズをテーマにした作品は小説にせよ劇にせよ82年頃より出版されていたが、文学流通のメイン・ストリームに初めて登場し注目を浴びたのは Sontag のこの短編だった。⁹ 86年11月24日号の *New Yorker* に掲載されたのである。それ以来、この短編はエイズ文学のアンソロジーには必ず含まれ

ることになった。¹⁰ その朗読劇バージョンも作られている。¹¹ Sontag の傾倒する前衛抽象画家 Howard Hodgkin の絵と組み合わせた1991年発行の Jonathan Cape 版の *The Way We Live Now* の印税はすべて合衆国とイギリスのエイズ団体に寄付されている。Sontag のフィクションの代表作でもある。Elaine Showalter の *Sexual Anarchy* (90) を始めとして論じる研究者も少なくない。¹²

この短編は、ひとりの男性のエイズの発病から入院、退院、そして再度の入院にわたる彼の状態の変化と彼をめぐる人々の思惑を描いている。それらの物語内容は、すべて彼をめぐる友人たちのおしゃべりの連鎖でできている。切れ目の判然としない直接話法と間接話法の混在した文章の連続から成っている。*The Way We Live Now* という作品の雰囲気をつかむために少し冒頭の部分を読んでみたい。

At first he was just losing weight, he felt only a little ill, Max said to Ellen, and he didn't call for an appointment with his doctor, according to Greg, because he was managing to keep on working at more or less the same rhythm, but he did stop smoking, Tanya pointed out, which suggests he was frightened, but also that he wanted, even more than he knew, to be healthy, or healthier, or maybe just to gain back a few pounds, said Orson, for he told her, Tanya went on, that he expected to be climbing the walls (isn't that what people say?) and found, to his surprise, that he didn't miss cigarettes at all and revelled in the sensation of his lungs' being ache-free for the first time in years. But did he have a good doctor, Stephen wanted to know, since it would have been crazy not to go for a checkup after the pressure was off and he back from the conference in Helsinki, even if by then he was feeling better.¹³

訳：初めはさ、体重が減ってきたただけだからさ、ほんの少し調子が悪いか
 なって感じたんだ、あいつさ、とマックスはエレンに話した。医者
 に予約する電話はしてないんだ、彼なんとか同じ調子でどうにかこう
 にか仕事もやれてるからね、とはグレッグのことば。だけど、たばこ
 はきっちりやめたじゃない、ということはほんとは彼、恐がってるっ
 てことでしょと指摘したのはタニヤだ。そりゃ健康でいたいさ、それっ
 て本人が自覚している以上だよ、もっと健康でいたいとだっと思って
 るよ、多分2-3ポンドは体重も増やしたがってるよ、と言ったのは
 オルソン。それにかまわずタニヤはしゃべり続けた。壁をはい昇るつ
 もりでって、よくそういう言い方するじゃないの、そういったとんで
 もない苦勞してたばこやめるつもりだったのに、全然たばこなんて吸
 いたくなくなってるのに気付いてびっくりしたんだってあの人言って
 たわよ。何年間かぶりに肺の痛みがなくてすごく嬉しかったって。そ
 れにしても彼ちゃんといい医者についてんだらうねとステイブンは
 知りたがった。差し迫った仕事も済んでるのに、見てもらわないなん
 て狂ってるんじゃないの、ヘルシンキでの会議も終わったのに。いく
 ら帰ってきたときには気分も前よりよくなっていたにしてもさ。

こういう文体の調子と空気は、Sontag の小説 *The Benefactor* (63) や
Death Kit (67)、短編集 *I, etcetera* (78) や *The Volcano Lover* (92) に使
 われている意識の流れ的な文体を知っている読者には珍しくない。こういう
 調子の文の連続がひとつの長いパラグラフを形成する。各パラグラフはエイ
 ズ患者の男性の状態の変化と友人たちへの波紋の各段階を語っている。そう
 したパラグラフが16集まってこの短編を構成することになる。エイズがさま
 ざまな差別の交錯しやすいきわめてPC的題材であり、PCを意識している
 作家が政治的良心をもって表現するならどんな表現がありえるかを考える本
 論の文脈からみて、注目すべき特徴を指摘してゆきたい。

この短編の分析の前に Sontag が *AIDS and Its Metaphors* で述べたこ

とを、思い出して整理してみるのは無駄なことではない。彼女が指摘したことは、ほぼ5つにまとめられる。第一が、エイズという病気を病気としてとらえることの困難さ、つまり病気を隠喩化して病気そのものを見ない心的態度である。¹⁴ 第二に、エイズを放蕩や犯罪や怠惰な享樂的生活への天罰としてとらえることから生じる治療法の問題主義、神秘主義、その非科学性の指摘である。¹⁵ 第三に病気への恐怖が病気そのものの危険度を実際より大きく見せ、病気をデーモン化し、外からの侵入者にとらえること。それによって患者まで侵入者として悪魔的な存在として見てしまうこと。Sontag はエイズに軍事的比喩が使われることを特に危惧している。エイズの人種的意味合いは、第三世界からの合衆国への攻撃、侵略という幻想を生じさせる。その幻想は、第三世界の搾取の上に成立する高度資本主義社会の先進国の自意識のゆがんだ反映であることも彼女は指摘している。¹⁶ 第四に侵略してくるものとして、「外部」「他者」としてエイズをとらえることから、それが自分たちの問題であることの直視と対処が遅れること。仮想敵国をでっちあげることによって国内の問題から国民の目を反らすのは政治家ばかりではない。¹⁷ 第五にエイズが現代 (modernity) の否定に利用されること。近代から現代の歴史とは、個人の自由意志の尊重、ライフ・スタイルの個人の選択、個人的快樂の肯定の推進、個人の共同体からの抑圧の軽減の推進だった。性の解放はその運動の大きな産物だったが、エイズは不治の性病と見られることによって、結果として「性の解放の縮小、一夫一婦制の節度ある性生活の理念の肥大化」を支持し伝統回帰を促し、個人の自由の制限、抑圧を肯定する。60年代の理想を否定的なものとしてとらえる機会とエイズになってしまう。¹⁸

評論で Sontag が指摘した、このようなエイズにまつわる問題を視野に置きながら、短編 *The Way We Live Now* を読むと、エイズを隠喩化しないこと、他者としめないこと、外部としめないこと、神話化しないこと、個人の自由への抑圧としめないことを実践するための書き方 “the ways she wrote then ①～⑨” が見えてくる。

①この短編は、ニューヨークというコスモポリタン的大都市だけで進行す

る。この設定は、エイズという病気にはりつけられた第三世界性（アフリカ起源ハイチ経由で侵入）＝外部からの侵入者というイメージの回避となる。エイズはこのわたしたちの世界のもの、どこかからやってきたエイリアンではないことを示す。

②中心となるエイズ患者の男性の友人として登場する人物は、全部で26人で、彼女ら彼らの名前の頭文字をならべるとアルファベットになる。単なる友人・知人の集合を超えた世界を形成する people のミニチュアとして26人が機能しているようだ。エイズ患者を囲むこのおしゃべり共同体の設定も、エイズに与えられた外部性を希薄にする。

③この26人について、名前で性別は見当がつくが、職業や人種や国籍や年齢という属性は不明である。作品内においていっさいそれらは言及されない。その属性が推測できるような俗語、地方語、業界用語も使われていない。ニュートラルなことばで繰りだされるおしゃべりだけで人物が提示される書法は、race と class の痕跡を意図的に消去している。これはエイズにあたえられた階級的・人種的スティグマの回避として機能する。

④中心になるエイズ患者の「彼」は、名前が最後まで提示されない。この主人公の名前の不在は、この病気の患者のリアルな特定化を避け、誰でもなく、だから誰でもあり、誰だってなりうるという一般性を印象づける。これもエイズの外部性と患者の他者性を去勢する。

⑤中心になるエイズ患者の男性は、名前は与えられていない。80年代中期において38才でミシシッピー出身で職業は美術品のディーラーか美術の研究者らしい。会議や大会で外国へ出張することも珍しくはない立場である。社交的で寛大で多くの女たちに愛され、チョコレートが好きで、食べることと同じくセックス也大いに楽しんできて、そのことをエイズ患者となっている現在でも後悔する気にならないのは、“Sex is too important to me, always has been, and if I get it, well, I get it” (Paragraph 11) だからと率直に語る人物である。万事につけ闊達で欲望に素直な人間と推測できる。いかにも60年代に青春を通過した自由人の社会的にも成功した、教養もある好

ましき愛すべきアメリカ人男性という設定である。この設定の意図は、エイズに与えられる貧困・犯罪というイメージの否定と、エイズ＝同性愛者という図式の否定ともとれるが、それ以上にこの設定のねらいは「60年代の理想」とエイズの間係を考えさせることにあるようでもある。エイズという病気を恐れるあまりに、こういうタイプの人間を生み出すことのできた現代アメリカ、豊かで自由なアメリカのやり方、理想がまちがっていたのだ、と考えるのは短絡的にすぎると感じさせる人物設定である。

⑥この短編においてエイズということばは一度も使われず、主人公の病気は単に、いつも a disease と言及される。この設定は、隠喩化され意味が充満して「病気」以上のものになっているエイズを等身大に縮小する働きをする。「病気」がエイズと名指されなくても物語が成立すること、ある難病の患者と彼を取り巻く友人たちの物語として過不足なく成立することは、エイズの神話化を防ぐ。

⑦物語内容にはおよそメロドラマじみた要素がない。たとえば中心になるエイズ患者がエイズになったことで著しい覚醒を得たとか、彼のまわりの友人たちが深い洞察や認識を得たとか、劇的な和解と理解が患者と友人の間に成立したとかいう類のいかにも美談・感動の物語・愛の物語風の展開はない。やたら悲痛で、不条理を嘆く悲劇風展開もない。作者は、肯定的方向にせよ否定的方向にせよエイズを非日常的な過剰な何かにすることを意志的に拒んでいる。その劇的要素の希薄さに物足りないものを感じるとすれば、それは自らの中にある無自覚な無責任な残酷さ、つまり隠喩化、神話化されたエイズの物語を消費したい欲望、エイズを他者のものにしたままエイズを愉しみたい欲望によるものかもしれないと、読者は気づくべきだ。

⑧注意深くいたずらに劇的な展開は避けられるが、患者の病状の進行と、それに伴う患者の変化の過程は丹念に描写される。その丹念さは、この短編を一種の情報小説とする。結果としてエイズの実態を知らせる啓蒙的な作用をする。病院での検査もしぶっていた (Pa.1)「彼」が入院し (Pa.2)、最初は病室への友人たちの来訪を喜んでいる (Pa.3) が、だんだんそれも当

たり前のこととして特に喜びも示さなくなっただけ、時には疲れ、静かな孤独な時間を必要とするようになり、今まで付けたこともない日記を付けだす (Pa.6)。治療の後遺症に苦しむ (Pa.7)。病室は二人部屋であり、決して隔離病室ではない (Pa.3)。一時的に退院して友人のひとりの介護を受けながら (Pa.8)、医師のすすめる治療法を在宅で受ける。ある友人のすすめるオカルト的な食事療法は拒否するけれど、別の友人のすすめる一種の心理療法には関心を持つ (Pa.9)。そのころには、自分の病名を口にだせるようになっていて、病気と一緒に暮らしているという姿勢が身につくようになっていく (Pa.10)。そのうちに彼は以前よりも友人たちについて関心を持ちだし彼のまわりには彼への忠誠を競いあうようなサークルができてゆくが、本当に会いたい恋人には自分の病気を彼は知らせない (Pa.11)。病状が小康状態になり体重も少し増えて彼は嬉しそうだが友人の目から見れば彼は確実に衰弱しつつある (Pa.12)。しかし彼はあくまでも悲観的になることなく冗談も忘れない (Pa.14)。その後再び彼は入院する。今度は個室だ (患者が個室に入れられるのは死期が近いときである)。彼はそのころには何か変化があるのが受け入れられなくなるほど衰弱している (Pa.15)。彼は奇妙に距離を置いた、心が遠くを見ているような状態になり見舞いにくる友人を不安にさせる。付けている日記の文字はすでに文字として形をなしていない (Pa.16)。むやみに劇的にしなくても、丁寧な描写だけでひとりの人間が病気になって死んでゆくことの重さは読者に伝わる。その重さに、エイズだろうが他の病気だろうが差はない。そのことにおいて、エイズはエイズということばが負わされる特殊性を剥ぎとられ、普遍性をもつことになる。

Showalter は、最後に患者が死亡するという結末ではないこの短編の終わり方を、open-ending だと指摘し、そのことによってエイズが必ず死にいたるものではないと作家が主張しているのだと述べている。¹⁹ それは納得の行く説明である。エイズを決定的に破滅的な宿痼であると、特別な病気であると恐れることが、エイズの隠喩化の直接的な原因である。しかし、エイズが不治の病であるかどうかまだ決定されていない。エイズが主人公に死を

与えて物語を終わらせるのはフィクションの常套だが、エイズはフィクションではなく克服すべき現実だ。Sontag の目的は、エイズの悲劇を書くことではない。エイズに苦しむ人間を書くことでもない。エイズを題材にして新奇な物語を生産することでもない。エイズをエイズとして提示することが作家の目的ならば、エイズ患者だからといって、主人公を死亡させる設定を選ぶ必要などないわけだ。

⑨他に注目すべきは、患者と彼の友人たちとの関係のありようである。衰弱しつつあり死が予定されている患者と健康な友人たちの間には明明白白な断絶がある。死に行く人間と生きている人間の間には安易な想像的融合や調和はない。生きて行く側は、生きて行く日常の矮小さと通俗性と猥雑さを体現している。Sontag は、友人たちの反応も丹念に書いているが、そこに描かれる友人たちは、いかにもささやかで良きにつけあしきにつけ平凡でリアルである。患者に花を持ってゆくのはいかにも病人のお見舞い風だから、ほかにないかなどと話し合ったり (Pa.2)、患者をひそかに愛している女友だちは、見舞い客が他にいと彼とふたりきりになれないからという理由から見舞いに行く回数を減らす (Pa.3)。彼がその病気になったことで、そしてその彼が前と変わらない彼なので、その病気への恐怖が減ったと語り合ったり、衰弱して行く彼を見るのが辛くて恐くて見舞いに行かなくなる臆病な友人がでてきたり、友人たちの間からもエイズの発病者がでたことにパニックすれすれの不安を感じあったり、エイズで死んだ知人について彼に知らせるかどうかが話し合ったりする。彼の母親をミシシッピーから呼ぶかどうか話し合い、まだ今の段階で呼ぶとかえって面倒だとか、そろそろ呼ぶしかないだろうとか細々気を砕きあう。彼らの中心になる患者は、病気の進行につれて静寂さを帯びて行くが、友人たちの連絡や不安の交換は何かを待ちのぞむかのように熱を帯びて行く。死にゆくであろう者は、あくまでもそれらしく、生きてゆくであろう人間はあくまでもそれらしく、両者には絶対的距離がある。そのことによって、逆説的に患者と友人たちの関係は真実味、迫真性をもつものとして読者に感じられる。逆説的にしか浮かび上がらない彼らの関係の神

聖さ、聖性が、死に臨む患者の孤独に奇妙な明るさを与えさえする。こうした患者と友人たちの関係のありようは、エイズという病気を媒介にして作られ維持される。人から人へ移る伝染病のエイズが、文字どおり人と人をつなぎ連携させる契機となることは、ブラック・ユーモアでしかない。しかし、これは逆説的に決して孤立してはいない、孤立できるわけがない人間存在の暗示であるとも考えられる。と同時に、エイズの他者性を否定する機能をもっているのではないか。誰かがエイズであることは、あなたになんらかの影響を与える、あなたのなかの何かを変える、というわけだ。

以上の点が、gender と race と class において重ねられたエイズの隠喩化・神話化・他者化・外部化の否定のために Sontag が選んだ書き方である。本論は、かなりの程度 *The Way We Live Now* におけるエイズの内部化は成功していると評価する。PC 度はかなり高いと評価する。しかし、そのことと読者への impact、効果の高さ、つまり感動とか衝撃を喚起しうるかどうかは別問題である。Sontag の選択した writing は、エイズの隠喩化の注意深い回避と政治的布値の韜晦に傾いていて、彼女が *AIDS and Its Metaphors* においてのべたことば「隠喩は回避さえすれば距離のおけるものではない。暴露して批判して追求して消耗させねばならない」²⁰ を実践してはいない。言説の政治性が避けられないのならば、その政治性を去勢する表現に留意するよりも、徹底的に過剰なまでにその政治性を顕示すること＝差別的言説を充満させたメタ差別物語を見せ付けるほうが効果的な場合もある。パロディのような変化球こそ衝撃力があるのかもしれない。いっそ事実だけの整理に撤するほうが有効かもしれない。しかし逆説的ではなく、また単なる記述の集積に任せるのではなく、正攻法で直球で、差別的表現に抵抗する文学表現も試みられるべきである。*The Way We Live Now* は、ダイナミズムと骨太さには欠けるが、知的で精緻な技術に支えられた直球である。

注)

本論は、1996年5月25日に立正大学において開催された日本英文学会第60回全国大会において口頭発表した内容に基づいている。

1. Leland Poague ed., *Conversation with Susan Sontag* (Jackson: UP of Mississippi, 1995) には、書くこととの社会的・政治的責任についての言及が多くなされている。評論の中では、*Trip to Hanoi* (New York: Farrar, Straus, Giroux, The Noonday P, 1968) がこのテーマに関して代表的である。最近は、戦火のサラエボにおいて演劇の演出を試みる形での芸術家としての社会・政治参加を考えている。“*Waiting for Godot in Sarajevo*,” *The Observer*, 24 October, 1993, London (木幡和枝：訳「サラエヴォでゴドーを待ちながら」『批評空間』II-1, 1994, 113-30.) を参照のこと。
2. Randy Shilts, *And The Band Played On: Politics, People, and The AIDS Epidemic* (Penguin, 1987) (曾田能宗：訳『そしてエイズは蔓延した』上下, 草思社, 1991)
3. Larry Kramer, *The Normal Heart* (Plume, Penguin, 1985) 94-106. Scene II において本論で紹介されたエピソードが Bruce によって語られている。*The Destiny of Me* (Plume, Penguin, 1993) は、この作品の続編である。この後日談的な続編において、AIDS とゲイたちを取りまく社会的環境はかなり違っている。ある程度 AIDS は日常化していて決定的な治療が見つからない難病であり、ゲイたちの人権を侵すような疫病という扱いはされていない。95年のトニー賞受賞作の Terrence McNally 作 *Love! Valour! Compassion!* (Plume, Penguin, 1995) に登場するゲイたちにとっても、AIDS は激しく悲劇的な何かとはとらえられていない。

ちなみに PWA という呼称は82年に引き続き83年に開かれた第2回 AIDS Forum で採択された。

4. 主なものに次の評論集があげられる。James Miller ed., *Fluid Exchanges: Artists and Critics in the AIDS Crisis* (Toronto: U of Toronto P, 1992)/ Emmanuel S. Nelson ed., *AIDS: The Literary Response* (New York: Twayne Pub., 1992)/ Timothy F. Murphy & Suzanne Poirier eds., *Writing AIDS: Gay Literature, Language, and Analysis* (New York: Columbia UP, 1993)/ Judith Laurence Pastore ed., *Confronting AIDS Through Literature: The Responsibilities of Representation* (Urbana U of Illinois P, 1993) がある。これらには、AIDS を題材にした作品の目録が収録されている。特に, Emmanuel

S.Nelson 編や Judith Laurence Pastore 編のものは、文学作品や批評以外の映画・ビデオやテレビドラマなど広範囲なジャンルを扱い極めて有益である。

5. 主に下記のものがある。Douglas Crimp ed., *AIDS: Cultural Analysis/Cultural Activism* (Cambridge: MIT P, 1988)/Erica Carter & Simon Watney eds., *Taking Liberties: AIDS and Cultural Politics* (London: Serpent's Tail, 1989) Nancy F.McKenzie, *The AIDS Reader: Social, Political, and Ethical Issues* (New York: Meridian, 1991)/Walt Odets, *In the Shadow of the Epidemic; Being HIV-Positive in the Age of AIDS* (Durham: Duke UP, 1995) など。注4)において言及された Emmanuel S.Nelson 編のものの219-20には、歴史的分析も含めた文献類が多く紹介されているので、参照されたい。

Sander L.Gilman は、早くから AIDS の表象に関する研究を発表している。*Disease and Representation: Image of Illness from Madness to AIDS* (Ithaca: Cornell UP, 1988) の14章参照。(本橋哲也：訳『病気と表象』ありな書房, 1996)/*Sexuality* (New York: John Wiley & Sons, 1989) の11章 (309-29) 参照。

6. James Finn Garner, *Politically Correct Bedtime Stories* (New York: Macmillan, 1994) (デーブ・スペクター&田口左紀子：訳『政治的に正しいおとぎ話』DHC, 1995), *Once Upon A More Enlightened Time* (95) (デーブ・スペクター&田口左紀子：訳『政治的にもっと正しいおとぎ話』DHC, 1995), *Politically Correct Holiday Stories* (95) (デーブ・スペクター&田口左紀子：訳『政治的に正しいクリスマス物語』DHC, 1996) などは、世界的なベスト・セラーになっている。

7. Jack Zips ed., *Don't Bet on the Prince: Contemporary Feminist Fairy Tales in North America and England* (Scholar P, 1986) には、フェミニストたちの意図的な童話の書き換え以外にも、Angela Carter, Joanna Russ, Anne Sexton, Margaret Atwood などの著名な作家の「おとぎ話からヒントを得た作品で、結果としてフェミニズム的意義を持つ新おとぎ話となった作品」や、おとぎ話に限らず、女性の心性形成に影響を与える「ロマンス」の親フェミニズム的書き換への作品も紹介されている。書き換えられたおとぎ話の王女たちは、自分の才覚で王子を捜しにいくが、王子の愚劣さに呆れて真の愛に目覚めるというパターンが多く採用される。このアンソロジーには伝統的おとぎ話の持つ性差別性に関する評論も含まれている。

また「ロマンス」の親フェミニズム的書き換への作品集としては、Beverly

West & Nancy Peske, *Frankly Scarlett, I Do Give a Dawn: a Parody Classic Romances Retold* (Harper Collins Pub., 1996) がある。ここでパロディにされる古典的ロマンスとは, *Gone With the Wind*, *Wuthering Heights*, *Casablanca*, *Romeo and Juliet*, *The Great Gatsby*, *Jane Eyre*, *The Scarlet Letter* を含めた12作品である。「ロマンス」とは, 要するにヒロイン虐待物語であり女性嫌悪の文学形式であることがあらわにされる。ヒロインが幸福になることは「ロマンス」を破壊することが明示される。

8. PC に関する批判の紹介としては井上謙治「PC と作家の自由」『英語青年』140 巻10号1995年1月号(研究社) 508-9を参照。肯定的評価については, 武田春子「私たちが言葉を変える: 米国に見る「差別」とのポジティブな向き合い方」『インパクション』86号, 1994年(インパクト出版会) 46-53を参照。英語文献としては下記のものがあげられる。PC Committee ed., *Are You PC?* (Berkeley: Ten Speed P., 1991)/S.D.Gaede, *When Tolerance is No Virtue: Political Correctness, Multiculturalism & Justice* (Downers Grove: Inter Varsity P, 1993)/Edith Kurzweil & William Philiam ed., *Our Country, Our Culture: The Politics of Political Correctness* (A Partisan Review P, 1994)/Jeffrey Williams ed., *PC Wars: Politics and Theory in the Academy* (New York: Routledge, 1995)/Marilyn Friedman & Jan Narveson, *Political Correctness: For and Against* (Rowman & Littlefield Pub., INC., 1995)/Stephen Richer & Lorna Weiy, *Beyond Political Correctness: Toward the Inclusive University* (Toronto: U of Toronto P, 1995)/Stanley Fish, *Professional Correctness: Literary Studies and Political Change* (Oxford: Clarendon P, 1995)/Christopher Newfield & Ronald Strickland, *After Political Correctness: The Humanities and Society in the 1990s* (Boulder: Westview P, 1995)/これらの題目からも見当がつくように論議はPCの啓蒙から過剰な運動への警告, もしくは中庸の模索へ論議が広がっている。特に大学の人文系の学問における多文化主義の導入による混乱の是正, アメリカンネスのとらえ直しに焦点が移っている。

9. たとえば, 最初のエイズ文学と指摘されているのは Dorothy Bryant, *A Day in San Francisco* (Berkeley: Ata Books, 1982) である。感染し発病した息子を訪ねた母の視点からエイズを見ているが, 悲観的な感傷性が勝ち, ゲイたちから非常に悪評を受けたという。84年頃からゲイたちによる啓蒙とサバイバルをめざした様々な文学表現が試みられた。特に演劇において顕著であった。それについては, John M.Clum, *Acting Gay: Male Homosexuality in Modern Drama*

(New York: Columbia UP, 1992) 39-82を参照。石井達朗『異装のセクシュアリティ』(新宿書房, 1991) 113-114を参照。

エイズを扱った作品の中で一般の読者を最も獲得したのは、Alice Hoffman, *At Risk* (New York: Berkley Books, 1988) であるが、輸血で感染した少女を主人公にすることによって、読者の共感と同情は得られたがエイズを外部化してしまっている。良心的ではあっても、エイズの問題を「外部からの災難」として描いてしまう事が、ストレートの作家には多いようである。

10. Sharon Oard Warner ed., *The Way We Write Now: Short Stories From the AIDS Crisis* (Carol Pub., Group, 1995) 1-20.
11. Elizabeth Osborn ed., *The Way We Live Now: American Plays & The AIDS Crisis* (New York: Theater Communication Group, 1990) 原作の短編の切れ目のない文章を Edward Parone が上演用書き直し台詞として分割している。26人の登場人物を女性3人男性2人の編成で演じるように構成された。
12. Elaine Showalter, *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle* (Penguin, 1990) 204-8. 彼女は論述の中で、“Sontag emphasizes the human community of AIDS, the chain of life and death links us all” (204) と述べ、この短編のエイズの内部と外部の交通を評価している。さらに寓話性にも言及している。作品の中に殉教者聖セバスチアンの像が出てきて、主人公は現代の殉教者として描かれているが、その殉教者が小説最後においても死なないことに Sontag の強い意志=この病気を不治の病い、宿命にしない意志を彼女は見ている。Annie Dawid, “The Way We Teach Now: Three Approaches to AIDS Literature” in *AIDS. The Literary Response*, 197-203 は、教材としての Sontag の短編が、人生に酷似して安易な判断を拒む要素が多いこと、したがって学生にとって容易に感情移入できない、つまり読者に知的な努力を要請する作品であることを指摘している。Joseph Cady, “Teaching about AIDS through Literature in a Medical School Curriculum” in *Confronting AIDS Through Literature*, 233-48 は、“a prime example of counterimmersive AIDS writing” (237) とこの短編を評している。意図的に対象に距離をおいた文体に、Cady は患者をめぐる人々の冷たさへの批判を作家がしていると考えているようだ。本論はその立場をとらず患者と友人間の距離に、安易な感傷性と同一化を排する姿勢を見ていることは、のちに言及される。
13. Susan Sontag, *The Way We Live Now* in Sharon Oard Warner ed., *The Way We Write Now*, 1.

14. Susan Sontag, *Illness as Metaphor/AIDS and Its Metaphors* (Penguin, 1991)
99-100. *Illness as Metaphor* は、最初1978年に Farrar, Straus & Giroux から出版された。*AIDS and Its Metaphors* は同出版社から1989年に出ている。(富山太佳夫：訳『隠喩としての病い・エイズとその隠喩』みすず書房, 1992)
15. Susan Sontag, 122.
16. Susan Sontag, 146, 97, 179.
17. Susan Sontag, 150.
18. Susan Sontag, 148-49.
19. Elaine Showalter, *Sexual Anarchy*, 205. 注12) の Showalter に関する記述を参照。
20. Susan Sontag, 179.

**Writing and Political Correctness:
A Study of Representation of AIDS in
Susan Sontag's *The Way We Live Now***

Kayoko Fujimori

With the permeation of multiculturalism on campuses, political correctness, in other words “a non discriminatory language movement”, has become one of the agenda in the United States of America. At present American writers are not allowed to be so naive to cling to a romantic myth of artists with complete freedom of representation. Our writing and representation, whether we like it or not, is unable to stand outside of their context, their political situation. Writers are required to balance between their freedom as artists and their responsibility for political correctness or incorrectness. It also stimulates some writers to find and create new styles of writing.

Sontag's *The Way We Live Now* proves that she is one of the keenly political-conscious writers. Her story should not be classified into neither AIDS-protest fictions nor AIDS-tragedies nor AIDS-epidemic horror stories which have been written and sold since 1982. As some insightful critics point out, AIDS has been violently and absurdly stigmatized. The tendency to fear and hate AIDS as the Other, as something evil and dissociated from respectable, good citizens, has not sufficiently weakened. AIDS is still located as “Untouchable”, in the lowest level of each hierarchy of gender, race, class, and moral. People with AIDS are still suffering from its political location rather

than from the illness, itself.

The Way We Live Now rejects AIDS as a punishment, a retribution, a catastrophe, an alien, and an invader. Her story elaborately attempts to impress AIDS just as a disease on readers, never as metaphors. Many devices Sontag selected to demystify and neutralize AIDS are successful to some extent. But her story may be too sophisticated to give the readers such emotional impact and dramatic catharses as other seemingly sensational AIDS fictions can do. However, it does not depreciate the value and challenge of Sontag's trial.